

日本の大学において留学生であるということ  
— 留学経験を支える「コミュニティ」の所在 —

井上 尚子

Being an International Student at a Japanese University:  
Exploring the Meanings of ‘Community’

INOUE Naoko

**Abstract**

This study examines the concept of ‘community’ as a key aspect of the international student experience. Existing literature on Japanese language education tends to portray the concept of community as a space where Japanese language learning occurs in relation to other people. This study expands upon the idea of community by drawing on literature from migration studies, and conceptualizing it as spaces that support everyday lives of international students. Semi-structured interviews with 16 international students at Japanese universities revealed a clear sense of belonging to diverse and multiple communities both in Japan and in their home countries. The participants considered these communities as essential places where they can get assistance, be valued as individuals, and/or feel safe and comfortable. The paper concludes with recommendations for educational institutions.

キーワード：コミュニティ つながり 居場所 ホーム 留学

**1. はじめに**

新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴って引き起こされた社会の様々な問題、いわゆるコロナ禍は、本誌の主題である日本語教育の現場が直面したことのある問題の中でも、最も規模や影響の範囲の大きな、対応の難しいものである。そして、

コロナ禍により生活が脅かされる人の数や立場には限りがないが、そうした人たちの中でも留学生は、その生活の経済的・社会的な基盤に最も深刻な脆さを抱えた人々のグループの1つであると言えるだろう。学費や生活費をアルバイト収入で賄ってきた留学生が、コロナ禍の影響でアルバイトの収入が激減してしまい、卒業間近にして学費を払えず大学を辞めなければならなくなってしまうかもしれないという事態が生じ（國仲，2020）、また、アメリカやイギリスなどのインナーサークル諸国（Kachru, 1992）においては、アジア、特に中国出身の留学生が、コロナ禍の煽りを受け人種差別にさらされている（Yu, Ting-Fang, Li & Liu, 2020）。

これらは、単に少数の不運な留学生に起きてしまった出来事と言うわけではないだろう。現代のグローバル化した社会における高等教育システムには、世界規模での政治経済的な不平等性が組み込まれ、それが再生産されていることが指摘されてきた（Altbach & Knight, 2007）。この批判的な視点を考慮すると、今回のコロナ禍の中で生じた留学生に対する差別や危害は、グローバルな高等教育システムの推進力とも言える留学という制度に内包された構造的な問題が、留学生に降りかかる形で顕在化したものとして捉えるほうが、その解決策を探る上でより適切な問題認識の仕方であるように思える。

この省察的な視点は、「留学」という営みが成立するためには、私たちの暮らす世界の政治的、経済的、文化的、そして社会的な秩序が保たれていることがまず何よりも大切であるということ、私たちに改めて強く認識させるものである。またそれは同時に、留学生が、彼/彼女らの行う留学の（少なくとも語義が指し示すところの）主目的である「学び」の活動に従事することが可能となるためには、「学び」の活動自体が行われる場に、そうした活動に関わる資源や機会がアクセス可能な形で存在するというに加えて、そもそも学びに取り組もうとする主体が安定して存在できることが欠かせないという、ごく当たり前のように思えることの大切さに、私たちの注意を向けるものでもある。すなわち、日本の大学において留学生が日本語学習（または日本語を用いた専門性の習得）の場に参加できるということは、まずは彼/女自身の「留学生」という立場が、日本の社会の中で行為主体性を持つ状態として実現されているということが前提となっているのである。別の言い方をすれば、彼/女らが留学生という立場にある行為主体であることが受け入れられ、また、必要なときには何らかの支援の手が差し伸べてもらえるような「居場所」や「場」となるコミュニティの存在が必要である、ということもできるだろう。

この見解に基づき、本研究は、日本の大学に留学し、日本語や日本語を用いて専門を学ぶ学生達にとって、どのようなコミュニティが彼/女らの留学生としての立場や生活を支える基盤となっているのかについて、経験的な探索を行う。そのために、彼/女らを対象に、自身の留学の動機や経験について尋ねる個別インタビューを行う。そ

して、彼/女らが自身の留学経験について振り返った語りの中に現れる、彼/女らが「日本の大学において留学生であること」を支える土台となっているのが、彼/女らとどのような関係性を持つ人々から構成されたコミュニティなのか、また、それらのコミュニティが、彼/女らがどのような帰属意識を持つことのできる「居場所」や「場」として認識されているのかについて、検討する。また同時に、そうしたコミュニティがいかに多様であるのと同時に動的であり、堅牢性と脆弱性を併せ持つものなのかについて、考察する。本稿の最後では、これらのインタビュー調査・分析からの知見に基づき、こうしたコミュニティの存在が日本語教育研究に対して持つ含意について、考察を行う。

## 2. 本研究の背景

辞書によると、「留学」は「よその土地、特に外国へ行って、ある程度長い期間勉強すること」、そして「留学生」は「外国へ留学して勉強する学生」と定義されている(松村, 2006, p.2878)。この「留学生」という立場を成立させるに当たっては、先ほど挙げたコロナ禍によって引き起こされた問題に顕著だったように、経済的な状況やビザといった、留学に関わる制度的・手続き的に求められる要件を満たすことがまずは必要となってくる。そしてもちろん、留学生の定義上の「本分」とも言える「勉強」をするためには、留学先でそのために必要な資源や機会に対してアクセスできることが重要である。そこには、教育機関や教育プログラム、そしてそれらについての情報などが含まれるだろう。

このように、留学を成立させる上では、様々な制度的・手続き的な要件や教育資源・機会へのアクセスが重要であることは疑いようもないが、しかし、それらは、留学生が「留学生」として本人らが望む活動に十全な形で取り組む上で必要なことの全てではない。移民や移住、異文化共生、多文化共生、マルチカルチュラルリズム、トランスナショナリズムを主題とした研究領域においては、自らの出身国とは異なる地において当人の目指す社会的活動(留学もその1つに含む)を十全な形で行うためには、制度的・手続き的な要件を満たしていることや教育資源・機会へのアクセスを持てていることに加えて、当人が、他者から人格を認められた一人の人間として存在することのできるコミュニティとの安定的な関係性を持てていることがこの上なく大切となることが指摘されている(Anderson, 2008; 額賀, 2014; Noble, 2005も参照)。なお、ここで「コミュニティ」という言葉で言及しているのは、辞書でその定義として示されている「人々が共同体意識を持って共同生活を営む一定の地域、およびその人々の集団」や「地域社会」「共同体」(松村, 2006, p.1026)といった、社会的な仕組みを伴って構造化され成立している人々の間の関係性のことでは必ずしもない。むしろ、「居場所」や「場」、「つながり」といった言葉でゆるやかに指し示されるような、様々な

形態・様相を取りながら動的に存在する人と人との間の関係性に対して、コミュニティという言葉当てている。

「マイノリティの文化や自尊心が尊重され、その過程でかれらが安定感や安心感を実感できる居場所をどのようにしてつくっていくか」に「異文化間教育の中心的なテーマの一つ」（額賀，2014, p.2）として取り組む額賀は、移民や移民二世を主な対象とした先行研究に基づき、「人々が帰属意識や愛着、安心感を抱く場所であり、トランスナショナルな文脈における居場所概念」（額賀，2014, p.5）として「ホーム（家／故郷）」の重要性に着目する。ここでの「ホーム」は、「母国」や「出身国」のような、一人の人に対して基本的に一つしか存在しないものとして捉えられるのではなく、移住先の国や両親・祖父母の母国なども含めた、複数の場と結びついた形で認識・想像されるものとして論じられている。そして、越境する若者にとっては、そのような複数的な「ホーム」や、自己肯定感や安心感を得ることができる「居場所」の存在が、当人の異国での活動の大切な基盤となることを、異文化間教育の経験的な先行研究を紹介しながら論じている。

こうしたコミュニティを対象とした経験的な研究は、大学生の留学のような一時的・暫定的な移住の形態を対象としたものよりも、長期移住や永住を前提とした移民に照準したものにおいて、蓄積の厚みと幅をより豊かに持つ形で発展してきたと言えるかもしれない。とは言い、留学生にとって留学が、習得を目的とする知識や技能を得るための学習活動に従事するという以前に、そもそも異国の地でそうした活動に従事することを（1つの）中心的な軸とした生活を送るということであると考えると、自身が望むような形で他者からの承認を得ることができ、自己肯定感や安心感を得ることのできるコミュニティや、本人がそのコミュニティと築く関係性が、「留学生」としての本人の活動を成立させる上でも重要な役割を果たしていることは想像に難くない。また実際、いくつかの研究においては、大学を中心とした留学生にとってのそうしたコミュニティの重要性が論じられている（Anderson, 2008; Slaten, Elison, Lee, Yough & Scalise, 2016）。

ここまで述べてきたように、本研究は、越境・移住を中心的な対象とする研究の中で議論されてきた、「居場所」や「場」、「つながり」としてのコミュニティという概念を援用して構成されるものであるが、それは同時に、日本語学習・教育研究の行ってきた「コミュニティ」研究の延長としても位置付けることができる。近年の日本語教育・学習の分野では、「コミュニティ」という概念を軸とした分析枠組みや実践形態が様々に構築され、議論されている。そこでは、学習者が「学習」という行為に従事するというを、習得対象として位置付けられる日本語のコンテンツに個々の学習者が対峙する個人作業として捉えるのではなく、教室で共に学ぶ学習者らから成る集団や、教室の外の社会的な文脈・環境をコミュニティとして捉え、そこに対して関

与の水準を上げながら「参加」(Lave & Wenger, 1991)していくことを、学習の核心であると考え。そして、それらコミュニティの中で文脈付けられた学習者と日本語の間の関係性を、日本語学習の実践の軸に据えるように日本語教育実践を組み替えていこうとする取り組みが、活発に行われている(トムソン木下, 2016; 2017)。また、日本語学習がコミュニティの文脈の中で行われるものとして捉えるこの視点をさらに拡大して、学習者が、自身の生活の中で、日本語を用いた社会的活動の行われている様々な「場」に参加する「経験」を得たり、そこで関わる人たちと「絆」を築くことそのものが日本語を学ぶということであるとして捉えようとするような、経験的な研究も行われている(三代, 2009; 2011; 2015)。この観点からは、アルバイトや大学のサークルなど、留学生の生活の中で重要な位置を占める社会的活動の行われる場が、活動の明示的な意義としては日本語教育機能を担ってなくとも、実際には日本語学習者が日本語を学ぶことを可能とする重要なコミュニティとして浮かび上がってくる。

これらの新しい日本語教育・学習研究の潮流は、コミュニティを、「日本語を学ぶ者」というアイデンティティが現れることを可能とする場として捉えるものだと言える。そしてその観点は、日本の大学において留学生として日本語を(または日本語を用いて専門科目を)学ぶという行為を成り立たせるコミュニティに対して中心的な注意・関心を向ける本研究の観点と、相互補完的なものとして捉えることができる。「留学生」が「日本語学習者」というアイデンティティを持ち日本語学習のコミュニティに加わっていくということは、まずはその本人が「留学生」としての活動を行うことができていることを抜きには語れないし、また逆に、「留学生」として行う活動の中に「日本語を学ぶこと」をしっかりと位置付けるためには、日本語学習のために必要な機会としてのコミュニティが必要である。このように本研究は、移民研究の行ってきた「コミュニティ」研究と、日本語学習研究の行ってきた「コミュニティ」研究との交点に立つ研究であり、両者のそれぞれにおける研究の蓄積の上に成立するものと言いうことができるだろう。

### 3. 研究目的と手法

前節で論じたように、本研究は、日本の大学において日本語を学ぶ(または日本語を媒介言語として何かの専門性を身につける)という留学のより良いあり方や、そのような留学活動に従事する日本語学習者に対する支援のあり方を検討するためには、日本の大学において留学生であるという学習者の立場や生活自体の土台となる「コミュニティ」について理解することが、非常に重要であると考え。ここでのコミュニティとは、同じく前節で述べたように、必ずしも既存の社会的カテゴリを持った集団ではなく、多彩な規模・形態・流動性を持った居場所・場・つながりのことを指

す。

本研究は、実際に日本の大学で学ぶ留学生らを支えるそうしたコミュニティの存在を、質的な手法を用いて探索的に調査し、未だ十分に理解が深められているとは言えないそうしたコミュニティについて、新たな知見を獲得することを目的とする。この探索的な調査に取り組むに当たっては、対象となるコミュニティの規模や所在といった実体的な特徴を把握することに焦点を絞るのではなく、留学生ら自身によるそうしたコミュニティの認識に対してより大きな注意を払う。つまり、彼/女らが持つ様々な人や場所との関係性のうちのどのようなものが、彼/女らが日本において「留学生」という立場であることや、様々な課題や挑戦に向き合う時間を支える帰属意識や安心感、自己肯定感を感じることに繋がっているのかを、質的に探索することを目指す。

こうした質的な探索を行うためには、質的なインタビューは最適な調査手法であると言える。本研究の対象とする、コミュニティの効果としての帰属意識や安心感、自己肯定感といった高度に主体的な感覚は、調査対象者である留学生らにとっても、常にそうした言葉と明示的に結びついて認識されているわけではない。むしろ、自らの留学経験を思い返して語りの中で、時に端的に、また時に曖昧で間接的な形で言語化されるものと考えられる。本研究の調査主題のこうした特徴は、研究手法としての質的インタビューが最も適切な形で取り扱うことができるものである。

本研究のためのインタビュー調査の手順の概要について述べる。調査協力者は、日本の某大学に在籍する留学生 15 名と、元留学生 1 名の合計 16 名である。調査協力者の募集は、大学内で掲示および配布したポスターを通じて行ったほか、インタビュー参加者に知人を紹介してもらったスノーボールサンプリング法 (King & Horrocks, 2010) を用いて行った。調査協力者の出身地は、東アジア (11 名)、東南アジア (4 名)、ヨーロッパ (1 名) である。調査協力者の性別は、女性 12 名と男性 4 名であった。調査協力者 16 名中、5 名が学部生、7 名が大学院生、1 名が元大学院生、1 名が大学院の研究生、2 名が母国の大学の大学院に所属する交換留学生で、年齢は 20 代前半から 30 代後半であった。調査協力者のインタビュー時点での日本にいた期間は、約 2ヶ月から約 8 年という開きがあった。以下、調査協力者の名前は匿名とし、A から P までのアルファベットを使い表記する。

データ収集は、2019 年の 10 月から 11 月にかけて、半構造化インタビュー (Richards, 2009) の形式で行った。インタビューは、調査協力者の承諾を得た上で IC レコーダーに録音した。インタビューにかかった時間は、30 分から 1 時間 20 分だった。予め用意したインタビューの質問は 13 項目あり、それらは大きく以下の 5 つのカテゴリーに構造化されていた。それらは、1. バックグラウンドについて、2. 出身国 (または日本) での日本語の学習経験について、3. 日本の大学に来ることを決めた経緯について、4. 日本にきてからの留学経験について、5. 将来について、である。全て

のインタビューについて、音声データから逐語録を作成し、King & Horrocks（2010）で示される手順に従い主題分析を行った。主題分析のコーディングを行う際は、インタビューが留学に関連して、強い関係性を持つ相手や、その関係性の特性・特質に対して特に注意を払いながら分析を行った。

#### 4. インタビュー調査の結果と分析

##### 4.1. 留学先の教育機関に関係したコミュニティ

インタビューとの会話の中で頻繁に登場したのは、留学先の教育機関内で構築されたコミュニティの存在である。特に、留学生の友人、大学の教員、そして寮のスタッフの存在が、繰り返し言及された。

最も多く言及されたのは、留学生の友人で構成されたコミュニティの存在である。インタビューは、各国から留学してきている留学生で構成されているコミュニティを、お互いに助け合い、学び合い、そして安心することのできる場として、大きな価値を見出していた。一例を挙げると、留学生が中心のゼミに所属している東アジア出身の学生Pさんは、同じゼミに所属する留学生を、自分を迎え入れ、学業を中心とした学生生活の様々な面で温かく助けてくれる「仲間」であると表現している。また、留学生の中で特に、同じ国からの留学生で築かれているコミュニティを高く評価しているインタビューもいた。例えば、出身国を同じくする友人と同じ寮に住んでいるという留学生Fさんは、その友人を、「私にとって家族みたい [な] 人」と表現している。この発言からは、Fさんがこの友人のことを自分自身の存在を認めてくれる人であると感じており、そんな友人と一緒に暮らす寮がFさんにとって安心できる居場所になっていることがうかがえる。これらの例が示すよう、インタビューにとっては、留学生で成り立つコミュニティの存在意義は非常に大きく、それらは、必要ときに助けてもらえる居場所であったり、「仲間」や「家族」の一員としてのものに近い安心感を得ることのできる居場所であったりすることがうかがえる。

そして次に、留学先の大学で教員から受けている様々なサポートに言及するインタビューの発言も多く見られた。何名かのインタビューは、学業面でのサポートを受け、担当の教員の優しさに感銘を受けたことに言及した。さらに、授業や学業面を超えたサポートを提供してくれる教員がいることもインタビューで言及され、それが大きな精神的な支えになりうることがうかがえた。大学に入ってから周囲の友人との人間関係で強い悩みを抱えていたNさんは、相談に乗ってくれた教員の存在に対する深い感謝の気持ちを語った。その教員は、どのようにNさんが直面している人間関係の問題を解決していけば良いか、親身になってNさんにアドバイスをしてくれた。Nさんは、「困った時ってなったら、すごい誰かいる」と語っており、学業のみならず、時には学業を超えた部分でサポートしてもらえる存在として教員を頼りに

している様子がかがえた。

最後に、インタビューの1人のみから得られた事例ではあるが、大学に付属する寮のスタッフの存在についても触れておきたい。交換留学生のFさんは、日本に到着してまだ間もない頃、寮に自分宛の荷物が届いた際に、寮のスタッフがそのことをFさんに名前を呼んで伝えてくれたことをはっきりと覚えていた。そのように、寮に住む多数の学生の一人に過ぎない自分の名前を、過ごした時間がまだ短いにもかかわらずにスタッフが覚えてくれたことを、「本当に親切で、優しくて…うれしかったです、あのとき」と回想した。同じくFさんは、寮の部屋から2日ほど出られなかった際にスタッフから安否確認の連絡があったことにも触れ、自分のことを気にしてくれたことを、「私あの時は、本当に感動しました。私あの日本へ来たばかり、…日本語も、日本のことは、あの時は慣れません。でも管理人さんは、私の安全の確認のためにわざわざ電話して、本当にあのとき感動しました。」と回想している。これらの事例からは、名前を覚えて貰っていたり、自分の存在を心配して貰ったりということを通じて、寮というコミュニティ、ひいては日本で、自分は不可視な存在ではなく他者に認められた存在であることを実感出来た、ということが、Fさんにとって感動的だったことがうかがえる。これらのそれぞれの事例は、多くの人にとっては日常の中にごく当たり前でありふれている小さなことに過ぎないかもしれない。しかし、Fさんにとっては来日したばかりで最も強く不安を感じている時期に起こったことであり、だからこそ、自分の存在が寮のスタッフに認められているという些細に思えるようなことが、こんなにも彼女の精神的な助けになったのだろう。

ここまで幾つか例を挙げてきたように、留学先の教育機関の中で関係性を築けたコミュニティ、特に、他の留学生、教員、寮のスタッフとのコミュニティが、自分が必要なサポートを受けられたり、自分自身の価値や存在を認めてもらえたり、自分が安心できたりするコミュニティとして、インタビューの中で言及された。

それと同時に、留学先機関でのそうしたコミュニティについてのインタビューの発話の中に、日本人学生を中心としたコミュニティがほとんど現れないことには、注意が必要である。実際に、インタビューの中では、日本人学生コミュニティに十全な形で参加することの難しさが、様々な形で言及された。「日本人と外国人のグループあんまりないんですよ…そういうところもったいないと思って」(Mさん)のような発言から推察できる通り、日本に留学に来る前に想像していたよりも、日本人学生と話す機会が少ないという声がインタビューの中でよく聞かれた。学部生のMさんは、入学してから積極的に日本人学生に話しかけたけれども、日本人学生がMさんとのコミュニケーションに消極的だったことに辛さを感じていた。

日本人の若者、もうせつかく、まあこっち、まあもちろん留学して、まあこっち



も一生懸命日本人に話しを掛けたりするんですけど、でも、あの周りの子達を見て、なんでせっかく、なんか自分と違う国の人、出会うのに、なんで、一生懸命積極的にあのコミュニケーションを取ろうとしないんだろう。…まあ自分はずっとこっち、まあ一方的に行っちゃうとやっぱり、もういづれかやる気が落ちて、はい、コミュニケーション取りたくなくなるし、実はそういう時期があったんですよ。なので私ずっとずっと一人になったんです。もうせっかく、海外行ったのになんで私ずっと一人じゃないとダメなんだろうな、とあって。

Mさんはこのように述べ、「(日本とは) 違う国の人」であるという、自分自身の国際的な存在価値やアイデンティティが周囲の日本人学生には認めてもらえずに、自信を失ったことがあったことに言及した。さらにMさんは、日本人学生と接触する中で、自分の日本語が劣ったものとして見下されているのではないかという不安を感じたことがあったとも語った。

このMさんの例が示唆するように、日本人学生のコミュニティに参加することには、留学生が予想していた以上の難しさがあり、留学生にとってサポートを得られたり、安心して所属できたり、存在を認められたりするコミュニティとしての関係性を築くことが困難らしいことがうかがえる。日本人学生の友人を作ることが容易であると答えたインタビューもいたが、その数は非常に限られており、また、主に交換留学生として日本に到着して間もない学生たちであった。彼/女らは、大学が設定した留学生向けのパーティで日本人の学生に出会えて嬉しかったと発言している。このように、友人作りのきっかけとなる機会が提供されることの多い、日本に到着したばかりの留学生には比較的容易に思える日本人学生主体のコミュニティへの参加も、長期的に留学している学生にとっては難しい課題として浮上してくることが推察される。

#### 4.2. 教育機関外のコミュニティ

留学先である教育機関の外部に存在するコミュニティが、助けを得られたり、存在を認められている感覚や安心感を得ることのできる居場所となっていることに言及するインタビュー談話も、数多くあった。そうしたコミュニティの主なものとしては、以下に例を示すよう、アルバイト先の同僚や上司、留学先の大学の外部にいる留学生の友人、そしてボランティアで出会った友人が挙げられていた。

まず、アルバイト先というコミュニティを、安心できる場であったり助けてもらえる場であったりと表現するインタビューが多く見られた。例えば、東アジア出身で学部生のCさんは、日本に来て楽しいと思ったことは何かという質問に対して、「アルバイトすることが楽しい」と答えている。日本人や日本人以外を含む一緒に働く人たちと交流するときに自分がとてもリラックスできることが、その主な理由である。

他にもCさんは、アルバイト先の交流のイベントで10人ほどで集まってバーベキューをしてとても嬉しかったことや、話していて優しくユーモアがある「とってもかわいいおじいさん」の同僚がいるといったことについても話してくれた。これらの発言からは、Cさんにとって、アルバイト先の同僚とのコミュニティが安心・リラックスできる居場所になっていることがうかがえる。また他のインタビューーにとっては、アルバイト先は安心できる場であるだけでなく、助けを得られる場でもあった。2名のインタビューーが、アルバイト先において、業務に関わることでサポートを受けたことがあるだけでなく、生活に関わる面でも個人的にサポートを受けたことがあると答えた。その具体的な例として、外国人として住居を見つけるのが困難だった際に、引越し先を探すのを手伝ってもらったことなどが挙げられた。この事例からは、大学外のアルバイト先が、留学生にとって安心できたり助けを求めたりすることのできる重要なコミュニティになっていることがうかがえる。

助けを受けたり、お互いに助け合ったりすることのできる存在として、所属する大学の外で関わりを持つ留学生の友人や先輩を挙げたインタビューーもいた。大学院生で東アジア出身のIさんは、母国の同じ大学出身で一足先に日本に留学していた先輩からサポートを受けることができたという。Iさんは、日本に来たばかりでまだ日本での生活に慣れないころ、先輩と一緒に住まわせてもらっていた。また、アルバイトも先輩が紹介してくれたおかげで、「私、みんなよりちょっと早く、…日本の生活に慣れましたね」と、先輩の存在の大きさを語った。このようにIさんは、留学の準備期間や実際に留学が始まった際に助けてもらえたり、助け合ったりできる大学外で関わりを持つ留学生のコミュニティを大事に感じていた。

大学外に存在する重要なコミュニティの事例として、最後に、ボランティア活動を紹介したい。学部生のMさんは、ボランティア活動を、自分自身の存在や価値を認めてもらうことのできる場として認識していた。Mさんは、主に大学の1年次に、日本人の学生と友達になろうと積極的に話しかけていたが、日本人の学生はMさんとのコミュニケーションに対して消極的で、その結果、Mさんは次第に強い孤独を感じるようになった(4.1参照)。その状況を打開しようと、Mさんは自らボランティア活動を探し、そこで新しい人間関係を構築しようと努力した。その結果、多くのボランティア活動に参加することができ、そこで母国と日本のボランティアの違いについてなどの会話を楽しむ機会を得ることができた。「やっと、周りと違う子たちが出てきて、結構喋ったんですよ。…自分で行動して、で、やっと。はい、もう違う子たちと出会って、はい、まあ自分の年下も、こういう素晴らしい子がいるんだっていうの、はい。」と語ってくれたように、Mさんは、大学内の日本人の同級生との交流では得られなかった、自分自身の存在や価値を認めてくれるボランティアという居場所を、自分自身で探し出したのである。

ここまで見てきたように、留学生であるインタビューーは、留学先の大学の外でも、安心感を得られたり、サポートを受けられたり、存在を認めてもらえたりするコミュニティを見つけ出していた。

#### 4.3. 本国でのコミュニティ

インタビューの中では、日本だけでなく、出身国でのコミュニティも、インタビューーが留学をする中でサポートや安心感を得ることができ、また、存在を認めてもらえるという意味で重要なものとして言及された。特に、インタビューーの家族と、母国での日本語学習者のつながりが、そのようなコミュニティとして重要な存在である。

インタビューーにとって、家族とは、日本への留学を応援し、また、日本に留学してから精神的な支えになってくれる、とても重要な存在であることがうかがえた。インタビューーからよく聞かれたのは、まだ留学前に母国にいた頃に、家族が日本語学習や日本への留学の可能性を唆してくれたり、インタビューーの留学に行きたいという夢を応援してくれたというものだった。例えば、元大学院生のJさんの日本語学習は、Jさんの父がきっかけとなっていた。「お父さんが勧めてくれたんです。…絶対に好きなもの勉強した方がいいんだ、という理由でしたね。」とJさんは振り返った。そして日本への留学についても、Jさんの父に、「今このチャンスを掴めないと一生後悔するぞって言われて、勇気づけられて、ああじゃあ行きます！って来ました。」と後押しされたという。そして、現在もJさんの日本での生活を応援してくれているということだった。また、日本の自然災害の多さ、日本語学習によるキャリアの将来性、歴史的な問題などの理由で当初は日本への留学に反対だった家族も、最終的にインタビューーの進路を応援してくれていた場合もあった。交換留学生のFさんの父は、当初Fさんの日本語学習に「猛反対」だったというが、「自分の好きなことですので、じゃあ、やりなさい。」や、「自分の好きなことは続けて。…自分で、あの、結果を、責任を持って」と最終的には応援してくれたという。日本に来てからも毎日、Fさんの父は連絡してきてくれており、「毎日毎日、私のことを心配して、今もです。毎日電話して、…Fちゃん、…今日は何をしました？」と気にかけてくれている。このように、日本語を学習し、日本への留学を検討し、そして実際に留学する上で、家族がインタビューーの意志を肯定し、精神的な支えになっていることがうかがえる。

家族とはまた異なる、出身国でのコミュニティの意義を考える上で興味深いのは、大学院生で東南アジア出身のKさんの例である。Kさんは、母国の故郷の日本語学習のコミュニティで、自分自身がロールモデルとして認められていると感じていた。Kさんは、彼女の説明によると「田舎」の出身であり、そこではボランティア団体に

よって日本語学習が行われていた。そこで日本語を勉強し始めたKさんは、英語や中国語ではなく日本語を勉強し続けたのではキャリアに活かせないかもしれない、と周囲の人に心配されながらも、母国で進学した大学でも日本語を専攻する。そしてその結果、日本語を活かした仕事に就くことができたのである。日本語習得は仕事を得ることにもつながるということコミュニティに対して示すことができ、「まあ、今やってること、大したものではないんですけども、でも本当に嬉しい。やっぱり…子供の時思い出すと…本当に嬉しい。」と語っている。自分自身もそこで学んできた、出身地の日本語学習のコミュニティでロールモデルとして認識されているということは、彼女に誇りを与えてくれ、それが彼女の自信につながっていることがうかがえた。Kさんは、現在は日本に留学して大学院に在籍しているが、将来的にはそのコミュニティの日本語学習に貢献したいとも考えている。

母国での日本語学習コミュニティが留学を支えてくれる例として、大学院生で東アジア出身のIさんの話にも触れておきたい。Iさんは、留学前のまだ母国にいる時期に、大学の友人らと日本に留学することを約束し合い、みんなで励ましあいながら努力を続け、最後には留学する夢を叶えることができた。日本ではその全員が別々の大学に留学することとなったが、「もし1人だったら多分、多分留学することが、もう、諦めましたね。」と述べ、友人の存在や、友人との助け合いがなければ、日本に留学するという目標を達成できなかったと感じていた。

ここまで見てきたように、母国の家族や出身地の日本語学習のコミュニティが、インタビューの日本での留学を支えるコミュニティとして言及された。

## 5. 結果のまとめと考察

前節で論じたように、インタビュー調査およびその分析からは、インタビューが築く多様な人々との様々な形態の関係性やつながりが、インタビューが「日本の大学において留学生であること」を支えてくれる大切なコミュニティとして本人らに認識されていることが示された。そして、そうしたコミュニティがインタビューの留学経験を支える上で担う役割として、次に述べる3つが中心的なものとしてインタビューの言説の中に繰り返し現れていた。

まず、困難に直面した際に支援を求めることのできるコミュニティである。このコミュニティを構成する主な人としては、大学内では留学生の友人や教員、そして大学外ではアルバイト先の上司や留学生の友人、また本国の家族や友人が挙げられた。インタビューがこれらのコミュニティを通して受けていると感じていたサポートは、学業に関係したものだけではなく、人間関係の悩みに関する相談や、留学中の不安な気持ちを理解してもらえるということ、そして時には大学生活とは直接関係のない住居の問題も含まれていた。このことは、留学生らが大学内外の様々な場面で困難を感

じているということと、したがって留学生へのサポートが多面的に行われる必要があること、そして、そのためのコミュニティが多様な形で形成され得ることを示唆するものである。

次に、自分自身の価値や存在を認めてもらえるコミュニティである。そうしたコミュニティとして、大学内外の留学生の友人の存在や、寮のスタッフの存在、そして留学生の母国にいる家族や、そこで所属していた日本語学習のコミュニティが挙げられた。自分自身のことを価値のある存在として認めてもらえているからこそ得られる安心感が、移民が社会的な行為主体性を発揮する上で非常に重要なことは既に指摘されているが（Noble, 2005）、本インタビューにおいても、名前を覚えてもらったり、自分の国ことを尋ねてもらったりという、一見とても些細なことが、インタビューーらが自己の存在を肯定的に捉えるためのきっかけとなったり、自分自身に対して自信を持つことにつながっていたことが読み取れた。

そして最後に、安心してリラックスできる安全な場所としてのコミュニティである。これに関しては、大学内外の留学生の友人、アルバイト先の同僚、そして本国の家族の存在が挙げられた。留学先での生活を送る中で、まるで家族であるかのように感じる事ができたり、一緒にいて心からリラックスすることのできる人たちと空間・時間を共有する機会のあることが、日本で暮らす上で精神的に大きな支えになっているようだった。また、母国にありながら現在の留学を応援してくれたり、将来の夢を応援してくれる家族の存在も、安心、安全な居場所を提供してくれるコミュニティとして認識されていた。

これらの3分類は相互排他的ではなく、お互いに重なる部分も少なくはないが、「日本の大学において留学生であることを」を支えるコミュニティに期待される役割のうちの最も重要な側面のいくつかを同定することができると言えるだろう。

またここでは、これらのコミュニティが、インタビューーに対して留学（またはその準備段階）の初期から当然のように与えられていたものではなく、彼/女らが自らの努力や挑戦、探索の結果として見出したものであるということを強調しておきたい。このことは、今後の留学生に対する支援のあり方を考える上で、2つの示唆を持つ。まず1つは、留学を支えるコミュニティの構築は、受け入れ国や受け入れ機関が制度的に準備すればそれで完了するものではない、ということである。「国と文化の境界を越える子どもたちにとって、自らの文化やアイデンティティが尊重される「居場所」はそこに当然のようにあるものではなく、制度との関係、他者との関係の中で新たに創り出していかなくてはならないものである」（額賀, 2014, p.2）のと同様に、留学生にとっても、そうしたコミュニティは、主体的に、周囲の環境に対して創造的・積極的な形で関与することを通じて構成・ネットワーク化されていく必要があると言えるだろう。しかしそれと同時に、もう1つの示唆である、そのような留学生の

主体的なコミュニティ形成を支援するような取り組みは、留学先となる日本の大学や社会の側で行うことができ、また、それが非常に大きな意味を持ち得るということにも、注意を払う必要がある。これに関しては、留学先の日本の大学において多数派である日本人学生と積極的な交流を期待していたものの、それを希望する形で叶えられていないと感じているインタビューーらの発言は少なくなかったことを思い返したい(4.1, Anderson, 2006 も参照)。留学生を支えるコミュニティは、留学先の社会の主要な社会的文脈を形成する学生(日本においては日本人の大学生)にとっても、留学生と共に学び合ったりお互いに助け合ったりすることのできる、掛け替えのない意義を持つ場にもなり得る。「大学において学ぶ者」としての社会的立場を同じくする、留学生と日本人学生の両者が交わることのできるような場の創造は、日本語教育実践の中では積極的に行われるようになってきているが、今後、そのような取り組みを日本語教育という枠を超えて拡大していくことが、日本語教育に関わる者がしっかりと向き合わなければならない課題だと言えるだろう。

## 6. まとめに代えて

本研究で行ったインタビューからは、本稿で紹介することのできた談話以外にも、留学という人生の1つの大きな行事に取り組むことの素晴らしさと難しさに触れる発言が数多く得られた。それらの全てを要約することは到底不可能だが、多くのインタビューーの語る留学経験に何か1つ共通した点を見出すことができるとすれば、それは、留学とは、予め周到に練られた計画を順序通りにこなしていくようなものではなく、常に変わり続ける状況の中で次々と生じる出来事に対して、持てる資源を総動員して向き合い続けるような、そんな経験だと言えるのではないだろうか。そのような留学を、そしてその中で行われる日本語(を用いた専門科目)の学習を支えるということは、すなわち、留学生の置かれた状況に対して常に私たちが目配りを怠らず、「日本の大学で学びたい」という希望・目標に向かって真摯に努力を続ける留学生に対して、どんな「支援」(Schein, 2009)ができるのかを考え続けるということでもある。留学生が自分自身の留学経験を支えてくれるコミュニティと望ましい関係性を築くことを促すような支援とは何か。本稿がそれを検討する上での一助となれば幸いである。

## 引用文献

- Altbach, P. G., & Knight, J. (2007). The internationalization of higher education: Motivations and realities. *Journal of Studies in International Education*, 11 (3/4), 290-305.
- Anderson, V. (2006). Who's not integrating? International women speak about New Zealand students. In F. Fallon & S. Chang (Eds.), *Proceedings of the 17th ISANA International Education Conference*,

- Sydney, Australia: ISANA International Education Association. Retrieved from <http://isana.proceedings.com.au/2006-conference>
- Anderson, V. (2008). Re-imagining 'interaction' and 'integration': Reflections on a university social group for international and local women. In T. McGrath (Ed.), *Proceedings of the 19th ISANA International Education Conference*, Sydney, Australia: ISANA International Education Association. Retrieved from <http://isana.proceedings.com.au/2008-conference>
- Kachru, B. B. (1992). Teaching World Englishes. In B. B. Kachru (Ed.), *The other tongue: English across cultures* (2nd ed., pp.355-365). Urbana: University of Illinois Press.
- King, N., & Horrocks, C. (2010). *Interviews in qualitative research*. London: SAGE.
- 國仲真一郎 (2020) 「コロナ禍で夢さえも…困窮する留学生たち」『NHK ニュース』2020年8月20日付。 <https://www3.nhk.or.jp/news/special/izon/20200820ryugakusei.html> (2020年8月20日参照)
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 三代純平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』6号: 1-14.
- 三代純平 (2011) 「日本語能力から「場」の議論へ—留学生のライフストーリー研究から」『早稲田日本語教育学』9号: 67-72.
- 三代純平 (2015) 「日本語教育という場をデザインする—教師の役割としての実践の共有」『言語文化教育研究』13巻: 27-49.
- 松村明 (編) (2019) 『大辞林 (第四版)』東京: 三省堂.
- Noble, G. (2005). The discomfort of strangers: Racism, incivility and ontological security in a relaxed and comfortable nation. *Journal of Intercultural Studies*, 26 (1), 107-120.
- 額賀美紗子 (2014) 「越境する若者と複数の「居場所」—異文化間教育学と居場所研究の交錯」『異文化間教育』40号: 1-17.
- Richards, K. (2009). Interviews. In J. Heigham & R. A. Croker (Eds.), *Qualitative research in applied linguistics* (pp.182-199). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Schein, E. H. (2009) *Helping: how to offer, give, and receive help*. Oakland: Berrett-Koehler Publishers.
- Slaten, C. D., Elison, Z. M., Lee, J., Yough, M., & Scalise, D. (2016). Belonging on campus: A qualitative inquiry of Asian international students. *The Counseling Psychologist*, 44 (3), 383-410.
- トムソン木下千尋 (編) (2016) 『人とつながり、世界とつながる日本語教育』東京: くろしお出版.
- トムソン木下千尋 (編) (2017) 『外国語学習の実践コミュニティ—参加する学びを作るしかけ』東京: ココ出版.
- Yu, Y., Ting-Fang, C., Li, L., & Liu, C. (2020, September 2). Trump and COVID force Chinese students to rethink the US. *NIKKEI Asian Review*. Retrieved from <https://asia.nikkei.com/Spotlight/The-Big-Story/Trump-and-COVID-force-Chinese-students-to-rethink-the-US>